

はじめに

本シリーズは、考古学と文献史学の融合を目指している。考古学の調査では、生活の場や遺物そのものが出土する。それに対して、中世の文献史料は、権力者側が記す史料が大半である。したがって、発掘資料と文献史料はまったく性格が異なっており、それらを総合的に把握することはなかなか難しい。また、考古資料には、編年や形式分類など固有な方法があり、文献史料には、古文書学・古記録学といった史料学が存在する。歴史の復元という観点からみても、それぞれに得意な分野と不得意な分野がある。

しかし、いずれも人々の生の痕跡であることは共通するし、それぞれが得意とする分野の成果を持ち寄り、それらを総合化することによって、より包括的で豊かな歴史像が復元されるはずである。

ただ言うは易く、行うのは難しい。たとえば、中世の博多には、「息浜」(おきのはま)という地名が存在した。そ

の文献上の初見は、『蒙古襲来絵詞』の文永の役(一二七四年)の部分である。これに対し、発掘成果によると、息浜は一世紀にはすでに陸地化していたことが明らかになっている。すなわち、約二世紀のタイムラグが存在する。こうしたタイムラグや資料としての性格の差を認識しながら、両者の関係を考え、その上で歴史の総合化を図ることが望まれる。本企画は、そうした試みの一つでもある。

本巻では、鎌倉時代から室町時代における武士の拠点に焦点を当てた。中世九州の武士たちの多様性を感じ取っていただきたい。

佐伯弘次

鎌倉幕府と九州

野木雄大

はじめに

中世という時代、京都や関東からはるか遠く離れた九州の動向が、幾度となく時代の節目となり、この国の歴史に

大きな転換をもたらした。このような九州の特徴の一端を明らかにするには、鎌倉幕府と九州との関係性について知ることが重要である。従来の研究では、北条氏によって西国守護の独占、専制化がなされ、鎌倉幕府が積極的に九州を支配していったことが前提となつていられるように思われる。しかし、鎌倉幕府は、本当に九州を支配することを望んだのだろうか。幕府による上からの九州支配という視点だけではなく、九州という地が、幕府あるいはこの時代にどの

ような影響を与えたのかという逆の視点が必要なのではなからうか。本章では、鎌倉幕府が九州という地域によつて動かされていったという視点を軸に、幕府の九州に対する諸政策を検討することで、他地域にはない九州の特徴を探つていきたい。

1 治承・寿永の内乱と九州

九州は平氏の強力な勢力基盤であった。平清盛・頼盛は大宰府を実質的に統べる大宰大貳を歴任することで大宰府を支配し、日宋貿易を掌握したが、特に、仁安元年(一一六六)一〇月、大貳となつた頼盛が慣例を破つて自ら現地に赴任したことの意義は大きい。頼盛赴任の二か月後には、

南北朝内乱と九州

山本隆一朗

はじめに

南北朝の内乱は日本史上において最も広域化・長期化した内乱のひとつである。その特徴としては、社会の広汎な階層が分裂・対立し、その紛争が朝廷の分裂や幕府の内訌という形で顕在化したことがあげられる。九州も当然その影響を強く受けることになった。

九州には他の西国諸国同様に、承久の乱を経て次々に東国武士が所領を得て入部し、彼らは「西遷御家人」とよばれた。なかでも九州に移った御家人たちは他の在地領主とは区別される存在であった。

九州の西遷御家人として勢力を拡大した武士には、少弐

(武藤)・大友・島津・千葉・宇都宮氏などの守護級の勢力をもつもののほかに、深堀・安富・伊東・小代・相良・渋谷・二階堂氏などの東国の地名を姓とする一族があげられよう。さらに、その下に「小地頭」として存在したのが鎌倉幕府成立以前からの在地の武士たちである。彼らの中には、菊池・大村・高来・草野氏などのように御家人身分を獲得したものもいた。鎌倉時代の九州の武士たちの支配構造は非常に複雑であった。

さらに、九州にとって政治的に重要な契機となったのがモンゴル戦争(文永・弘安の役)である。この対外戦争において最前線となった筑前・長門国は、異国警固番役によって集まった御家人や近隣荘園の住人たちによって急速に防備が固められた。この異国警固番役の勤仕は、在地の武士

大友氏の拠点 豊後府中(府内)

長田弘通

1 鎌倉時代の豊後府中

守護所と国衙

大友氏と豊後国の関係を語る時、常套句的に「大友氏は、鎌倉時代初めに初代能直よしなおが豊後国守護となつて以来、戦国時代に至るまで約四〇〇年間豊後国を支配した」といわれる。かくいう筆者も、公務で担当する簡単な解説文や歴史講座などで、幾度となくこのフレーズを使用してきた。しかし、初代大友能直とその子二代親秀ちかひでが豊後国守護であったことを明確に示す史料は残っていない。にも関わらず、「初代大友能直が豊後国守護となつて以来」との表現が許されるのは、関係史料が示す状況証拠により、初代能直は

ほぼ間違いなく豊後国守護であつたと推測できるからである。

ただ、「大友家文書録」や『大友興廃記』など江戸時代に編さんされた歴史書では、豊後国守護となつた能直が建久七年(一一九六)三月、家臣古庄重能ふるしゅうしげよしを先発隊として派遣したところ、大野郡の武士大野泰基やすもとが神角じんかく(大野郡)に本城を構えて反乱を起こし、平定後、能直自身が豊後へ入国したとするが、能直と親秀ともに豊後国に下向し、居住した事実はない。しかし、守護本人は下向しなくとも、守護としての役目は果たさなければならず、古庄重能が下向し、その子孫である小田原氏が守護代となつたとされる。能直の代官二守護代として派遣された古庄氏が、権限を行使するため構えたとあろう拠点が置かれた場所は不明である